

開催地名：岐阜県高山市	
開催日時	令和2年2月24日（月） 13:20～14:25
開催場所	高山市丹生川支所
語り部	宮本 英一（千葉県旭市）
参加者	まちづくり協議会、市民防災研究会 54名
開催経緯	<p>当市では、東日本大震災のような大規模な災害の経験がないため、実際に被災地で活動した地域住民の方の体験を聞き、教訓を得ることによって、防災意識の向上や防災機能の強化を図る必要がある。</p>
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>私は7年前より、千葉県 NPO 防災千葉の皆さんと一緒に、海岸に近い小学校で出前授業を行ったり、県内高校生による防災授業の手伝いなどを行っている。旭市は平成17年7月に、旭市、飯岡町、海上町、干潟町が合併してできた自治体で、千葉県の北東に位置し、人口は約66,500名の、農業と漁業の市である。醤油と漁業で有名な、銚子市の隣に立地している。もともと私は飯岡町の職員であり、合併後は旭市の職員となり、3月11日の東日本大震災発生時は、旭市を退職して地区の区長をしていた。</p> <p>（2）3月11日 東日本大震災</p> <p>東日本大震災時に当市で発生した津波の到達距離は、200メートルから300メートルなので、当市全体が津波に襲われたわけではない。従って、震源地である東北地方で起きた津波とは、規模的には比べようもないが、震源地から遠い千葉県でも津波による大きな被害があった事実を、皆様には是非知っていただきたいと思う。</p> <p>午後2時46分に大きな地震が発生してから、約1時間後に津波が来た。予想通り、津波は堤防を越えることはなかった。津波がおさまると、避難した人たちは戻ってきた。私を含めて、誰もが津波はこれで終わりだと判断していた。しかし、これで終わりではなかった。離岸堤防の先まで潮が引いており、防災無線では大津波警報の発令と緊急避難の呼びかけが繰り返されていた。そして午後5時22分ごろ、津波が私の家を襲い、あっという間に海水にのまれてしまった。水中に巻き込まれながら、車が流れていく光景が目に入った。木造の家とコンクリートの建物に挟まれた屋根の残骸が見えたので、妻と一緒に無我夢中で屋根の上に上ることができ、何とか助かった。</p> <p>津波で亡くなった方々や行方不明の方々の多くは、1度目の津波の時は避難していたが、もうこれで終わりだと思ってしまい、家に帰ってから2度目の津波によって流された方がほとんどである。</p>

### (3) 震災発生後の生活

しばらくは余震も多く、避難命令も頻繁に出たので、その都度標高が高いところに避難した。近隣では、避難所に避難していた間に貴重品やお金を盗まれた方や、テレビを取られた方もおり、落ち着いた生活はできず、この先どうしたらいいのか不安を抱えて毎日を送った。

また、避難所での生活でも、問題点は多かった。最も困ったのはトイレの問題である。消防団が簡易防火水槽を設置し、避難所従事者が、トイレにバケツで水を汲み置きしたが、それでもトイレが汚物だらけになった。停電や断水でも、トイレだけは使えるような避難所の整備が必要である。

さらには、避難所をホテルと勘違いしている人が多かったことも挙げられる。行政としても、避難所で極力普段に近い生活が送れるように努めてはいるが、当然限界がある。避難者の中から避難所運営を行う人を選出するべきだという意見や、その際は男性だけに限らず、女性の配置も必要だという意見が挙がった。最も重要なのは、「自分の事は自分で行う」という避難者への意識づけであろう。

### (4) 最後に

津波に流されて、一番反省している点は、大津波警報が出ても、自分だけは大丈夫だと思い、避難しなかったことである。嬉しかったことは、ボランティアの皆さんなど、たくさんの人たちが家の片づけの手伝いをしてくれたことだ。

大きな災害が起きると、個人や地域に想定しなかった様々な問題が起きる。ここにいる皆さんは、災害発生時には指導的な役割を求められると思うが、自分自身や家族が被災者になる場合もある。どうか、ご自分の家族を守りながら、地域の人たちのためにどういう行動をとったらいいのか、日頃から考えていただきたいと思う。



開催地より

津波の貴重な体験や、避難所運営等、被災地で活動した地域住民の方の体験談についてお話いただいた。今後の防災活動に役立てていきたいと思う。